

大塩平八郎の『古本大学刮目』について

吉 田 公 平

一 はじめに

大塩平八郎の主著は『洗心洞劄記』である。大塩平八郎の著書の中では『洗心洞劄記』が頻繁に刊行されたから、『洗心洞劄記』が主著であることには特に異論はない。しかし、大塩平八郎が思索を懲らして最初に書き続けた著書は『洗心洞劄記』ではなくして、『古本大学刮目』であった。此の事について考えてみたい。

先に大塩平八郎の生涯を概観しておきたい。

第一期。修学時代・摸索時代。

一七七二年・安永元年～一八一五年・文化一二年。誕生から二十三歳まで。

この間十四歳。大阪東町奉行所与力見習として出仕。

第二期。大阪東町奉行所与力時代。

一八一六年・文化一三年～一八三〇年・天保元年。二十四歳から三十八歳まで。

呂新吾の『呻吟語』を媒介して王陽明の良知心学に開眼する。結核(?)を抱えながら、大阪東町奉行の高

井実徳に重用されて辣腕を振るい三大事功（豊田貢事件。弓削新左衛門事件。破戒僧事件）を処理。この間、頼山陽、田能村竹田などと交流する。王陽明三百年祭を行う。高井実徳が大阪東町奉行を辞職したのに伴い、大阪東町奉行与力を辞職する。

第三期。洗心洞にて講学に専念して良知心学を深め、著書を公刊する。

一八三一年・天保二年～一八三五年・天保六年。三十九歳から四十三歳まで。

第四期。所謂大塩の乱。

一八三六年・天保七年～一八三七年・天保八年。

大塩平八郎の生涯を四期に区分したが便宜論に過ぎない。大塩平八郎が佐藤一斎に宛てた書簡の中で、修学課程について述懐している以外には、自ら語る事が少ないので、詳細は分からない。所謂大塩の乱のために大塩平八郎自身が焼却したこと、膨大な蔵書を貧民救済のために売却したこと、関係者が反乱の累を恐れて大塩平八郎との縁を語る事を控えたこと、などのために究明を困難にしている。

第二期の与力時代の事は、その職責の仕組みなどについて基礎知識に乏しいので、門外漢の小生は発言する資格が無い。

第四期の所謂大塩の乱については、その経緯、事後処理、乱後の風説、明治大正期の文化史における「大塩もの」の流行については興味を覚えるものの、調査不十分なので、今は取り上げない。

陽明学・良知心学の心性論を究明してきた小生には、第三期こそが関心の的となる。そこで、この時期に大塩平八

郎が刊行した書籍について簡略に整理しておきたい。

一八三二年・天保二年。三十九歳。「洗心洞学名学則並読書書目」成る。

一八三二年・天保三年。四十歳。『古本大学刮目』稿本。

一八三三年・天保四年。四十一歳。『洗心洞劄記』『儒門空虚聚語』を家塾にて刊行。

一八三四年・天保五年。四十二歳。『増補孝経彙註』成稿。『古本大学刮目』刊行。

一八三五年・天保六年。四十三歳。『増補孝経彙註』『洗心洞劄記』大阪精義堂より刊行。『洗心洞劄記附録抄』『儒

門空虚聚語』『儒門空虚聚語附録抄』京屋佐次郎・河内屋刊行。

幸田成友の『大塩平八郎』によると、『古本大学刮目』については三十歳前から取り掛かっていたという。王陽明の良知心学に開眼したその当初から、王陽明が提案した『古本大学』について、歴代の儒学者が著した『大学』解釈を歴覧して王陽明の『大学』理解を確認する作業にとりかかったものであろう。この作業を展開するのと併行して、『洗心洞劄記』が書き継がれたのであるまいか。言い換えるならば、『古本大学刮目』を下敷きしながら『洗心洞劄記』を読む事が、大塩平八郎の心性論を理解する上で肝要なのではないだろうか。

二 『古本大学刮目』刊行の経緯

井上哲次郎・蟹江義丸共編『日本倫理彙編』第三卷陽明学派下の冒頭に佐藤一斎の『言志録』四巻が収録されている。次に大塩平八郎の『古本大学刮目』七巻、『儒門空虚聚語』三巻、『増補孝経彙註』三巻が収録されている。此の

三書に『洗心洞劄記』を加えて洗心洞四部というが、『洗心洞劄記』は流布本が多いことを配慮して収録していない。編者は『古本大学刮目』について次のようにいう。

『古本大学刮目』一卷（通例七卷に分綴せり）は天保三年六月を以て上木する所に係る。然れども「梱外不出之書」として門人以外のものに示さず。漢唐以後の諸儒の大学に関する意見、註釈中王学の旨に協へるものを纂集し、之れに自己の意見を加へたるものなり。卷首に王陽明の古本大学傍註を附載せり。（傍註を挿註に変更したるは植字の都合による）此書天保八年の乱に焼けて残本を存せずといふと雖も、稀に秘蔵するものあり。今、井上哲次郎所蔵の版本と春秋園主巖垣晃男氏所蔵の写本とによりて印行す。茲に巖垣晃男が其秘蔵の書籍の書籍を貸与せられたるを謝す。

『古本大学刮目』に就いて簡にして要をえた改題である。「梱外不出之書」であつたこと、所謂大塩の乱の折りに焼失したこと、しかし、わずかに災禍を免れたものを底本にして印行したわけである。

『古本大学刮目』の成書には数奇な経緯がある。此の事については石崎東国の『中斎大塩先生年譜』が詳しいので、次に適宜に段落を儲けて紹介することにした。い。（カタカナをひらがなに改めた。又句読点を追加分説した。書名は『』をつけた）

是年夏六月先生『古本大学刮目』七卷を家塾に刻す。『大学刮目』は先生畢生の努力を集むる所にして、又先生最初の著述に係る。先生初文政六年を以て稿を起し、天保三年、其功を終るまで、実に十年の歳月を経たり。三年四月、初て一たび之を頼山陽に示す。山陽其綱領を閲して、是れ一家の言に非ず。昔儒格言の府と評し、其成る

を待て之に序せんことを約す。先生六月之が自序を作り、門人宇津木・湯川・松本三子之を訓点す。九月山陽没して、遂に其序を得ず。先生深く以て憾みとなす。

其校讐成るに及で、門人之を刻せんことを乞ふ。先生之を謝するに、昔儒は程伊川の『中庸』自註を火き、朱子の死前三日猶ほ『大学』誠意の章を改め、陽明王子の自著『五経臆説』を秦火に附せるの例を挙げ、古人経を註するの難きを説き、止むを得ずして、『洗心洞劄記』を以て刻を門人に許す。天保四年『劄記』刻成る。先生之を神廟文庫に納め、次で八月『朱子文集』『陸王二子全集』、他『古本大学』を両文庫に奉納するや、其『古本大学』跋に記して云ふ。陋撰『古本大学刮目』五卷、他日復奉納焉。豫告於神明矣と。

続けて、佐藤一斎に『古本大学刮目』に序文の執筆を乞うたが断られたこと。斉藤拙堂が序文を執筆する意思があったが実現しなかったことを記しているが、省略する。

蓋し『大学刮目』は王氏王門親炙私淑諸氏及び漢唐以下明清諸儒二百三十餘家の経説を集むと雖も、一に皆な先生の按語を以て之を一貫す。先生自序結論に云ふ。

名曰古本大学刮目。正将之死以修心理不二知行合一之学。然則不但負陽明子之教。庶幾亦不叛孔子程子之学要與朱子之本旨矣。嗚呼、從吾遊之徒、亦将刮目、則不可不読之也云々。世之君子看之則必罪蕪陋之多言、降伏者自少、而攻撃者多矣。然因論学、集失於吾身、固所甘心也。（于時天保三年歲次壬辰夏六月題于洗心洞）

大塩平八郎は天保三年に『古本大学刮目』の校訂が成るや、益友の平松樂齋に次のような書簡を送っている。

『大学刮目』八卷。此節校訂相済申候。古人之説を引候得共、理財用人之利害を論じ有之。自然御寸益にも相成候はば、一部為寫進達仕候様可取計哉。十四年以来精力を盡し居有之と。右を御一覽万事御推察可被下候。五月廿九日。

大塩平八郎の自負心がにじみ出ている書簡である。つづけて石崎東国は『古本大学刮目』について、次のように総括してゐる。

按ずるに、先生の『大学刮目』壬辰夏稿成てより、茲に至て四年、初め稿を起してより即十四年、癸巳神廟奉納預告には五卷と云ひ、今次校訂を終て即ち八卷となし、其刻して七卷となれるは、製本の宜しきに依るるべしと雖、取捨出入又畢生の精力茲に覃ぶるに見る。尚ほ程伊川の『易伝』、朱子の『大学章句』に於けるが如し。而して今年遂に之を筐中より出して剞劂に附するに至る。蓋し又止むを得ざるに出つ。何となれば小人をして国家を治めしむれば菑害並至る。今日飢饉菑害の頻出する、一に無道の小人、天下に立つに因るざるは無し。先生常に『大学』卒章の経を引て有司に告ぐる所、即ち理財用人の説、先生最も刮目に力説す。是れ今日に刻せずて止むべからずとする所以なり。

惜哉其刻成るの時は秦火既に起るの時にして、彼の四年前預しめ神廟奉納を告げたるもの、又之を果すを得ざるに終る。而して後人灰燼中に收拾するものあり。今日希に其全本を見るを得るは幸と云ふ可き也。

大塩平八郎の真意を忖度した親切な解説である。『古本大学刮目』が刊行されるまでの経緯については、これ以上の解説は贅説であろう。但し、第三節末尾の指摘は着目するに価する。この事については次に述べる事にする。

三 田結莊千里の『大学心解』『古本大学心印』

田結莊千里については『近世漢学者著述伝記大辞典附系譜年表』（関儀一郎・関義直共編、関義直発行、琳琅閣書店・井上書店発売、昭和十八年発行）には『大阪名家著述目録』を参考にして、次のように紹介されている。

田結莊千里（陽明学）。名は邦光、後ち秘、字は必香、斎治と称し、千里は其号なり。但馬の人。業を大塩中斎・篠崎小竹・斉藤鑾江に受け、又画・砲術・蘭学を修む。維新の際勤王を唱へ、国防を策す。

著述。大学心解四卷。大学心印六卷。古文孝経心解七卷。増註伝習録三卷。孫子心解十四卷。皇朝名家詩選五卷。海防策一卷。時務策一卷。重修身世準繩四卷。桑土芻言九卷刊。散兵神機附一卷。千文草字尤二卷。読墨痕六卷刊。血淚痕四卷。首書評注芥舟学画編四卷。遊履痕附長江大観図六卷。行餘遊戲一卷。

田結莊千里は多彩な人生を送った人物であるが、幸田成友の『大塩平八郎』では、「但馬守約、字は直養。『劄記』点校者の一人であるのみならず、『劄記』の版下は守約の筆に成ったものだ。後田結莊千里と改名。」という。

田結莊千里（一八一五年・文化十二年～一八九六年・明治二十九年）について東敬治主幹『陽明学』八十六号に土屋鳳洲の「田結莊千里翁伝」、東敬治の「田結莊千里翁の学に就きて」を掲載する。田結莊千里の書齋を玄武洞という。玄武洞文庫の蔵書が曾孫の田結莊金治から昭和四十五年に、その子息の哲治より平成八年・十三年に、大阪府立中之島図書館に寄贈された。中之島図書館では平成十五年に玄武洞文庫展を開催し、玄武洞目録、玄武洞文庫改題目録を刊行している。尚田結莊千里については天坊幸彦氏に「田結莊千里翁伝」（ヒストリヤ第十四号）があるという。未見。

大塩平八郎の『古本大学刮目』と関連する著書として、田結莊千里には『大学心解』と『古本大学心印』がある。石崎当国が「後人灰燼中に収拾するものあり」とする中の一本なのかもしれない。

『大学心解』については『玄武洞文庫解題目録』によれば、「写四冊／田結莊齊治著。自筆。玄武洞一〇野紙を用い、二七丁、二七丁、二六丁、四七丁／巻頭に唐寅九月念五日、千里宛東正純の漢牘、明治十八年九月二十七日自序がある。」小生が目睹し得たのは不分巻の写本。一一八丁。（末尾の九丁が脱落している不全本である）。玄武洞用箋。内題は「大学心解 田結莊邦光齊治纂述」という。巻頭に掲載する東澤瀉が田結莊千里に宛てた書簡の全文を紹介する。

田千里先生座下

東正純稽首謹白

昔者聞大名如雷、欲一參講帷、不図得罪旧藩、幽囚海島。明治革命、会赦得還。家衰身病、不能離鄉里、常以為憾矣。今茲族子保、豚兒敬治、並謁左右、諄々提誨、以不失所守。感謝々々。因得読先生所著大学心解。字々析絲、句々見血、炳掲微旨、貫串餘義。反復玩味、不能釈手。大抵大学一書、吾学定本、而其義最難了。三輪執齋以下、佐藤一斎、吉邨秋陽、並縉々乎斯書。而未能如先生詳且尽。可謂会衆流帰諸海矣。而注意一在治国平天下章焉。堯隱匿之所伏、察神姦之所由、秦越人之治病、五臟徵結、無所遁者。愉快矣哉。窃謂当今任国家者、不知病症之原、則何得奏功。是從前諸家所無、而今日急務在此。正純之所最感服也。苟知其心。則千載旦暮、苟不知其心、則当面万里、正純雖未得先生、復何憾焉。敢書所見、質諸左右。先生以為如何。正純旧證心録忝電纜。伏冀先生賜兩三字、置諸卷首。將以取重後人也。輓近修朱学人間有之。而至王学、殆無一人。非先生、吾復望誰哉。事見許死、且不朽矣。臨楮悵然。不悉所言。不宣。庚寅復正九月念五日 敬空。

次に田結莊千里が明治十八年如月二十七日に執筆した序文、十月初六に認めた「又識」があるのだが、読み解き難

いために紹介できないことを遺憾とする。

『大学心解』の本文は一行二十四字、一葉十行。この『大学心解』は田結莊千里が「纂述」したものであり、大塩平八郎が先儒の大学解を紹介して自説を按語として締めくくった『古本大学刮目』とは体裁が異なっている。「精義」と「通義」を開陳しており、行間に挿入文が至る所に細字で書き込まれているところを見ると、これは草稿本であろうか。

四 田結莊千里の『古本大学心印』

『古本大学心印』については、『玄武洞文庫解題目録』に「写六冊／大塩後素（中齋）著、田結莊齊治（千里）刪正・筆。二四×十六糎、玄武洞一〇行野紙を用い、四〇丁・三六丁・五一丁・四五丁・五九丁・六三丁／巻頭に大塩中齋原序、中齋の凡例、明治二十三年千里の附言、明治二十四年の千里の記事（由来書）がある。／内題「古本大学心印原名古本大学刮目」。／大塩中齋の「古本大学刮目」を刪正したもの。／「古本大学刮目」は、明の王守仁傍注本を基にして按文を施し、天保八年前後に版を起したが、著者中齋が乱をおこし自刃したので、市販されなかった。」とある。小生が目睹したのは、乾卷八十二丁坤卷二百二十三丁。外山氏野線（外山苔園）。本文は一葉十行、一行二十三字。序文は一葉八行、一行二十字。外山氏野線に筆写されているので、外山苔園が原本『古本大学心印』六冊本を二巻本に改めて筆写したものであろうか。楷書体の美本である。外山氏筆写本の全体の構成は次の通りである。

序 洗心洞主人大塩後素撰。（執筆年次を欠く）。

田結莊千里記。明治二十一年八月。七十四翁 田結莊邦光千里記。

凡例。（『古本大学刮目』とは本旨は変わらないが文章に移動がある。文末に「洗心洞後素中齋識」を追加する。

頭注あり。）

附言。「明治二十三年夏至之日七十六翁 田結莊邦光千里誌」。

記事。「明治二十四年二月四日 即夏至辛卯立春也。七十七翁 田結莊邦光千里記」。

本文。内題「古本大学心印 原名古本大学刮目」中齋大塩後素原輯 千里田結莊邦光刪正。

本文の構成は大塩平八郎の『古本大学刮目』と大きく異なっている。まず「古本大学刮目綱領」を「大学刮目篇」と改めて独自に編纂し、折講。大意。通解。餘論と標題して隨處に頭注を加えている。先儒の所説を収録した後に「中齋曰」として中齋の按語を適宜引用しているが、「邦光曰」として頻繁に按語が加えられている。『古本大学刮目』にあった「引用姓氏」「大学古本旁註」はない。つまりは大塩平八郎の『古本大学刮目』を素材にして、独自に「纂述」されたものである。

このような「纂述」に成ったことについて、田結莊千里は明治二十一年の記で、次のように云っている。

古本大学刮目拾之于灰燼之跡。寸裂分斷。幾無完紙。若此序文。東填西塞。強為語次。其或零片脫闕、沒復可知之何。乃加一二點語。以為閼接。非敢忘己之無似猥加損之文辭也。姑存之以俟他日獲成書。明治二十一年八月。七十四翁田結莊邦光記。

所謂大塩の乱後に焼け跡から『古本大学刮目』の燃け残りを收拾して苦心して取り敢えず仕上げたものだという。先に石崎当国が指摘した、その一例である。

附言は六條ある。その第一条では纂述の苦心について、次のように云う。

中齋先生。一生神力。注于此書。余無似自不揣。焚餘之零片。東填西塞。為之編次。此是出于不得已也。俟他日獲成書而復于其旧。

第二条では纂述の基本方針について、次のように云う。

本書集説。以先生過人才学。包羅該収。在初学則却憾似望洋無紀律。況灰燼之殘片。無可如之何也。故集説中。有更增全文。或損全文。及刪語句者。又變交其位置。從而與旧觀。異其面目者。此是出于不得已也。裁之時宜而然也。

第三条では纂述の際に元の綱領を刮目篇に改めた意図を述べて次のように云う。

卷首類集論説之語。目曰綱領。綱領之字。似不得其当。今改曰刮目篇。此是所学人宜刮目而看者也。原総称本書曰古本大学刮目。書自註経。非與末学爭長短也。故反唇之語尽削之。改曰古本大学心印。取之于堯舜之正伝、而孔氏之心印之語也。顧庶乎不墜講学氣象焉。

第四条では刮目篇の纂述の意図を述べて次のように云う。

本註中駁末学之説。及不切于解經之語。尽移之于刮目篇。分類為十三門。每門提書題意。一目之下。旨趣自通明。

第五条では按語・評注について次のように云う。

刮目篇。欄外評注。係愚妄語。本編評注。採之于其按語中。以甄別之。署于每說上。

第六条では先に述べた『大学心解』に言及する。

本書編纂、本不免無望洋之嘆。況於殘燬之餘乎。於是大学心解。約說經義。與大学心印（原名大学刮目）合看。則蓋博而有要。

明治二十三年夏至之日 七十六翁 田結莊邦光千里誌

田結莊千里にとっては、『古本大学心印』と『大学心解』の二書は一連の著述であった。『大学心解』については玄武洞文庫所蔵の全本を目撃しないままに、先に紹介した。最期に記事を紹介することにした。

中齋先師。刻是書。工未半。分裂壞散。至天下絶無完書。余本與校讐之勞。故慨之殊最深矣。乃當時拮零片于灰燼之餘者有之。越数年獲斷簡于某處者有之。尋西走東奔。究力之所及。而搜索幾六十年于茲。而猶是闕如矣。嚴毅熊谷氏。為余言諸西京介夫伊藤氏。又言諸東京某氏。經三年之久。是歲一月二十三日。熊谷氏來云。嘗所搜求之書。今輒致之。余倉皇繙之。猶是殘毀之缺本也。而其写字不清楚。亥豕魯魚之訛実居多。又有遺字者。有剩字者、或有脱句者贅句者。於是日夜苦力。稍加正釐。補落々闕處。始得為完本者。熊谷伊藤二君之賜也。余以餘景

既遁于西山之今日。得二君之助。天之未喪斯文歟。先師亦應沒遺懷也。先是余述心解。約說經旨。然而刮目属于鳥有。心快々常抱歉。於此又搜索四方。偶得遺稿若干葉。卒思完本不可復見。裁制其殘編。刪有餘補不足、既有年所。一二日而方將卒其業。何計此日而同完其闕文。是亦可謂千載一奇遇哉。乃誌其顛末。以告後之看斯書者云。

明治二十四年二月四日。即夏至辛卯立春也。

七十七翁 田結莊 邦光 千里記

田結莊千里は明治維新以降、多彩な活躍をした人物であるが、その生涯を通して、先師大塩平八郎の遺著を灰燼の中に搜索して遺文の復元を期待して、生涯に亘って精根を傾けた一門人である。この「記事」はその思いを真摯に吐露したものである。畢生の遺著である。石崎東国は嘗てこの『古本大学心印』を読む機会があったか否か。今看る事のできる『古本大学心解』は外山苔園の転写本かと推察する。楷書体の美本である。田結莊千里は『古本大学刮目』は大塩平八郎の生前には刊行されなかったと云う。所謂大塩の乱の故に洗心洞が焼却されたために、その灰燼の中から收拾し、整理纂述を重ねて、取り敢えず「古本大学心印」を為し遂げた。五冊・写本『古本大学刮目』は今は大阪府立図書館玄武洞文庫に收藏されている。明治三十四年に発行された『日本倫理彙編』に『古本大学刮目』を収録した際に共編者の井上哲次郎・蟹江義丸は序説で「井上哲次郎所蔵の版本と春秋園主巖晃男所蔵の写本とによりて印行す」というが「版本」が有ったのだろうか。『国書総目録』によると東京大学にも三冊本『古本大学刮目』が所蔵されているというが「版本」ではない。巖垣晃男についても知るところが無い。ともあれ『日本倫理彙編』に収録された御蔭で今は容易に看る事ができることは幸いである。田結莊千里翁は明治二十九年逝去している。享年八十二歳であった。田結莊千里は『古本大学刮目』の「成書」を再び看る事はできたのか。平成十五年六月十五日（日）（六月二十八日（土））の期間に大阪府立図書館は玄武洞文庫展——幕末・明治期大阪の偉才田結莊千里の足跡——を開催した。

その時の案内書に「古本大学刮目 五冊 明治二十四年千里筆跋あり 一部補写」と紹介している。明治二十四年といえはその先に紹介した記事のあとがき「二月四日即夏正辛卯立春也。七十七翁 田結莊邦光千記」と署名した歳のことである。すると此の記事の署名の跡に完本『古本大学刮目』を目睹しを跋文筆写し「二部補写」したことになる。このあと五年間を生きのびて明治二十九年に逝去しているから、宿願を果たしたことになる。井上哲次郎・蟹江義丸が版本に基づいたというのも偽りでは無かった。

五 『古本大学刮目』読解

田結莊千里は『古本大学刮目』が刊行される際に「校讐」の任に当たったと述べているから、所謂大塩の乱の前には、『古本大学刮目』を熟読して全体の構成を記憶していたに違いない。田結莊千里の目には『古本大学刮目』は大塩平八郎が成書したものであるが、内容的には未完成であると思案していた節がある。だからこそ、単純な復元ではなくして「纂述」を決意させたのであろう。ともあれ田結莊千里は紛う方無く『古本大学刮目』の熱心な読者であった。否、先師大塩平八郎の熱心な信奉者であった。『古本大学心印』『大学心解』の二部作はその所産である。この後、大塩平八郎は自由民権運動が盛んになるにつれ、或いは儒教が再評価されるにつれ、特に『洗心洞劄記』が重ねて刊行されて、江戸期の儒者の著書としては、佐藤一斎の『言志四録』と並んで広く読まれた。しかし、『古本大学刮目』を読む人は少なかった。『大学』の注釈書として受け取られたからかも知れない。ともかくも大塩平八郎の思想に関心を持つ者にとっては『洗心洞劄記』こそが必読書であったし、それで事足りたのであろう。その意味では『古本大学刮目』は忘れられた遺著であった。

小生は大塩平八郎の思想史研究については明るくはないのだが、この『古本大学刮目』に限ってみると、『古本大学

刮目』に着目したもので特色あるものを挙げると、一つは宮城公子編著『大塩中斎』（『日本の名著』二七、中央公論社、昭和五十三年十一月）である。「日本の名著」の特色の一つは、現代語訳を読者に提供したことである。岩波書店刊行の「日本思想大系」は原漢文を書き下し文にし、詳しい註釈をつけて紹介した。井上哲次郎・蟹江義丸共編『日本倫理彙編』は、原漢文のままに編輯刊行している。明治期には木版本の出版がなお盛んであったが、読者の中には漢籍・写本は入手しがたかった。真偽が定かでないままに流布していたものもあった（例、熊沢蕃山）。明治期の知識人は漢学の素養が深かったし、又「国漢」（国語と漢文）が教育現場では必須科目だったから、原漢文のままでも読みこなす力があつた。所が敗戦の後、漢学は旧思想という烙印が押され、国語の中に間借りすることになり、国民が漢籍に直に親しむ機会が激減した。研究者でさえも原漢文を読みこなす力が減退した。勢い日本の哲学資源を紹介する時には、まずは書き下し文にされ、次に現代語訳されて紹介されることになったのである。漢学者の思想内容を読者に紹介する上では大きな功績である。特に日本の伝統思想に関心を示す外国人研究者にとつては、中央公論社「日本の名著」は朗報であつた。もう一つは森田康夫著『大塩平八郎と陽明学』（日本史研究叢刊、和泉書院、二〇〇八年）である。大塩平八郎と陽明学との関係を多角的に考察された。

この二著ともに『古本大学刮目』を分析しておられる。小生は内容を子細に論評するゆとりがないので、次の一点のみを所感として述べておきたい。

それは大塩平八郎の儒学思想を開示する際に用いた鍵概念である「太虚」についてである。旧来、朱子の理気論などをめぐって一元論か二元論かと論議された。まるで理や気がそれ自体として存在するかの如き理解であつた。特に「氣」は「ガス状のもの」と云れたことがあつた。小生の理解では「氣」とは存在するものの総称概念であり、「氣」という元素の如きものが存在するわけではない。「理」とは存在し現象する「氣」の在り方を云うのである。明治期に紹介された西欧哲学が存在論として一元論二元論を立論していたことの影響下に、理気論を存在論として理解して対

抗したのが誤読の初めであつたのか。「心」とは肉団心（心臓）ではないと述べたのは唐代の禪学徒である（『臨濟錄』）。この「心」解釈は新儒教にも継承された。人間を実践・実存主体と措定する際の総称鍵概念である。まるで「心」というものが人体内に実物として実在するかの如き理解は浅解である。それを象徴的に示すのが、山井湧氏の気の哲学、理の哲学、心の哲学の措定である。その余風は払拭されていない。宮城公子、森田康夫両氏が太塩尾平八郎の「太虚」思想の解析には示唆される事もあるのだが、「太虚」そのものをまるで一物であるかに理解している節がある。論理学が不毛であつた中国の新儒教徒の心性論は読みがたいのだが、その読み方については、稿を改めて考えてみたい。